

嘉吉の乱関係軍記の一考察

——『赤松盛衰記』をめぐって——

松林靖明

一

嘉吉元年（一四四一）六月二十四日、播磨の守護大名赤松満祐が、將軍足利義教を自邸に招き暗殺した事件は、たとえ義教が「万人恐怖」の専制君主であっても、時の人々を震撼させた大事件であった。この事件を描いた軍記作品は数が多く、「室町軍記総覧」は以下の七群に分類している。

- 第一群：『嘉吉物語』系統。
- 第二群：『赤松嘉吉乱記』系統。
- 第三群：『嘉吉記』系統。
- 第四群：『赤松記』系統。

第五群：『赤松之伝』系統。
第六群：『赤松盛衰記』系統。
第七群：『永井良左衛門本 赤松記』系統。

これらの作品の内、第一群の『嘉吉物語』は物語的性格が強く、「物語系」とも呼ぶべき作品であり、第二群以下の諸作品は実録的性格を持つ、「実録系」と呼ぶのがふさわしい作品である。「実録系」作品の中では、「赤松盛衰記」が最も長編で、かつ詳細である。もっとも「赤松盛衰記」という本は、内容的に首尾一貫した統一性のある作品ではなく、雑纂とでもいうべき、嘉吉の乱や赤松家に関するさまざまな資料を取り込んだ作品である。「赤松盛衰記」の異本は、現在二本が知られるのみで、一本は龍野歴史文化資料館に伝わる上下二巻の本、もう一本は

静嘉堂文庫の上中下の三卷本（東大史料編纂所に謄写本あり）である。両書の違いは中巻の有無だけといつてもよい程で、中巻は上巻の異説をまとめ、後から増補されたものと考えられている。¹⁾

異説の増補を行った静嘉堂文庫本「赤松盛衰記」は、上巻と中巻のそれぞれに嘉吉の乱の頭末を記す記事を持つ。章段名でいうなら、上巻「赤松満祐嘉吉之乱」（以下、上巻「嘉吉之乱」と略す）、中巻「赤松嘉吉年間録」（以下、中巻「嘉吉年間録」と略す）がそれである。両者を比較してみると、中巻「嘉吉年間録」のほうが記述量が多く、当然詳細であるが、中でも合戦部分の記事が上巻「嘉吉之乱」とは比べ物にならないくらい詳しいのである。全体的には簡略な上巻「嘉吉之乱」であるが、上巻にしかない記事がいくつか存在する。それを検討することにより、両者の特色を考えてみる。

一一

上巻「嘉吉之乱」は簡単な赤松家の系譜から始まる。満祐と子教康の時代に至り、將軍足利義教によって播磨・備前・美作の三ヶ国を召し上げられそうになり、このままでは赤松家の滅

亡必至と見て、満祐は義教を招いて殺害したのである。赤松は西洞院の自邸を焼き払い、義教の首を携えて本国播磨に下り、書写山坂本に一族・家臣を集め軍評定を行なう。

上巻「嘉吉之乱」（引用一）

各相談して、先嘉例に任せ書写山・広峯山へ御祈禱申上、則願書を籠られ、其後性具入道（筆者注 満祐）宗徒の侍を近付て評定しけるは、一門私の計略然らざる義なり。所詮備中国井原の武衛を尊敬して、日の將軍と号し、不日に入浴を遂、一家天下の執権をして国土を掌に握らん事疑ひあるべからず。此義如何と宣へば、諸侍ども心中には門出あしく勿体なしと思へども異義に及ばず、尤と同ず。則、侍百騎計りにて、典厩備中国井原へ御迎に下りぬ。御辞退に及ばず、武衛手勢五十騎にて、坂本へ上着し給ふ。寔に危ふき事、蜂蟻の命に異ならずと人申合り。幾程なく御兄弟皆討れさせ給ふ。扱又、性具天下の管領へ耐手を請書状を上べきのよし申されければ、尤と評定して遣す。

これに対し中巻「嘉吉年間録」は、同じ評定の場面を次のように記している。

其時、性具入道座上ニアツテ申サレケル、我年来ノ鬱憤ニ依テ、將軍義教卿ヲ殺シ奉リ、本懐ヲ遂ゲヌレバ六波羅ヨ

リノ討手攻下ラン事遠カルマジ。当家ノ浮沈コノ時ニアリ。一門幕下心ヲヒトシウシ、敵ヲ防グノ謀ヲメグラシ、籠城ノ用意スベシト有ケレバ、常陸介進出テ申サレケルハ、一族ノ面々忠義ニ心ヲ寄ル事、鉄壁ヨリ堅ケレバ、ヲノ／＼心ヲ合シテ堅固ニ城ヲ守リ、専ラ敵ヲ討防ギナバ、假令京都ヨリ討手ノ軍勢孔明張良方武勇ヲ尽シ、幾万騎攻来ルトモ片時ニ追ヒ散ラシ、勝鬃ヲ揚ン事、何ノ疑カアラン。急ギ討手ヲ乞フノ書牒ヲツカワシ、寄手ノ勢ヲマツニシクハナシ。

中卷「嘉吉年間録」の記事は、性具入道満祐が將軍義教を暗殺したのは長年の「鬱憤」によるものであり、こうなった以上一致閉結して討手を迎え撃とうというもので、これに対する弟常陸介祐尚の意見も一族の結束を固め、こちらから幕府に討手を請おうというもので、いわば猫を囓んでしまった窮鼠が一丸となって大敵を当ろうという単純な話となっている。これに対して上卷「嘉吉之乱」は、やや事情が違っている。これに対して峯山に願書を籠めたこと、②備中にいる井原の武衛を担ぎ出したこと、の中卷「嘉吉年間録」に見えない二つの記事がここに記されている。①の願書についてはここでは触れないことにして、②の井原の武衛に関して検討しておこう。

井原の武衛とは足利尊氏の子で直義の猶子となった直冬の孫義尊である。萬里小路時房の日記「建内記」嘉吉元年七月十七日条に、

直冬子孫、為禪僧在播州、以彼可取立申由赤松称之云々。

とあり、さらに後日書き入れた傍書には、

後聞、元来在播州、已称將軍云々、比興々々、其弟禪僧

在備中国、已欲逃播州之処、備中国守護手勢打取之、其

首後日京着也

と記されている。また、同年八月二十一日条には、

播州故直冬子孫僧、先日^孫孫之僧号井原御所、赤松取立之還

俗、其名義尊、以彼判形諸方廻文之間、写彼判相触諸聞、

於帶件判之人者可召捕之由、管領加下知云々。

これらの記事から、足利直冬の孫は二人いて、ともに僧侶であったが還俗し、もともと播磨にいた一人は赤松氏にかつがれ將軍と称し、もう一人は備中国にいたが義尊と名乗り、赤松に取り立てられ井原御所と呼ばれたと読み取れる。

ここで注意すべきは、七月十七日が暗殺事件から二十日余りもたっていることで、將軍を殺された幕府の対応がいかにも遅いものであったかを示している。義教の跡を継いだ千也茶丸（義

勝)が幼少であつたこともあり、幕府内部の守護大名たちの中に、赤松に同心の者がいるやも知れぬ不安もあつて、討手がなかなか進発しなかつたのである。その間に赤松は次第に体勢を整えたようである。その噂が都に断片的にもたらされたのであり、中には「建内記」同日条に「南方御子孫小倉入道宮御末子奉盜播州赤松 賦云々」と後日誤報と判明する噂も飛んでいる。南朝の皇子を担ぎ出すことはなかつたが、赤松は足利尊氏の血筋を継ぐ者を奉じたのである。さらに、八月二十一日条の記事では、赤松が担ぎ出した義尊の名で、諸国に軍勢催促状を出し、公然と都の義勝將軍に對抗したのである。今谷明氏が「結城合戦と同じで、赤松家は幕府に対して明確に叛逆者の集団と化したのである」といわれるとおりである。

さて前掲の上巻「嘉吉之乱」(引用1)の文を読むと、將軍を討ち「国土を掌に握」るには、大義名分が必要であり、守護大名である赤松「一門」の「私の計略」では具合が悪い、そこで井原にいる武衛を將軍と名乗らせ、赤松がその「執権」となったならば、ことは容易であると明確に記されている。国土を手中に収める野心が、始めから赤松にあつたか否かは不明だが、上巻「嘉吉之乱」は赤松が叛逆者の道に一步踏み込んだことを明記し、その赤松満祐の言葉を聞いた「諸侍ども」が、心中

「門出あしく勿体なし」とは思ったものの、異議を申し立てることはできなかったといい、また赤松が備中井原の義尊を迎え取つた記事にも、義尊は「御辞退に及ばず」坂本城に到着したが、「人」がそれを「蜂蟻の命」のように危ういことだといひ、事実義尊とその兄弟が討たれたと記すのは、「諸侍ども」や「人」の口を借りて、赤松の野望を批判的に描いているからにほかならない。

三

いつまでもやって来ない幕府の討手を待ちかねて、赤松は「討手を請書状」即ち幕府への挑戦状を送り付ける。その討手を待つ間に、坂本城に様々な奇妙な出来事が起つた。上巻「嘉吉之乱」(引用2)は、

去程に、坂本には色々希異なる事どもあるよし、上下胸を冷す計りなり。然る間、關原の武衛をば、御所と号し、東坂本定願寺に移し奉る。日夜の酒宴猿樂芸能を尽し、月面白夜は連歌をし、或は詩歌管絃等の遊興なり。武衛・性具笑坪に入て、祝詞せらる、の所に、書写山より長吏御使とて鬘マづら結たる童子来つて、教康と問答して此坂本を

立去給へとて、一首歌を詠す。

此世こそせばくはてはめ西洞院後は御法の船に教康

と云捨ければ、教康の云、汝を見るに俗童にあらず、何人ぞと問ければ、童子の云、我は開山聖人の眷属、乙若とは我事なり。哀なる哉、父子一門、運命三七日の内外なりといふて、かき消す様に失にけり。

と、その不思議の一例を上げているが、中巻「嘉吉年間録」には全く載せない記事である。童子の歌に出る「西洞院」は都における赤松の屋敷の地で、赤松はここを焼き払って播磨に下国している。この歌も、また童子の言葉も赤松敗退の予言となっていることは注目される。

次に、幕府軍が進攻し、各地で赤松勢が不利になり、書写坂本の城を捨て、本拠地の城山の城に立て籠もる場面、中巻「嘉吉年間録」は、

去程ニ性具入道満祐ハ、筋西郡堀ノ城ハ其要害宜シカラズトテ、一族幕下評義ノ上、掛西郡城山ノ城ニ籠ケル。抑木山ノ城タルヤ、山高ク谷深フシテイト冷シク、岷々タル長山ハルカニシテ、南北ニ峰ツゞキ、遠境数百里モ眼下ニ是ヲ見下シ、麓ニハ伊保ノ大河流レ、籠城堅固ノ要害ナリ。……一族幕下ノ大小名、都合其勢三万余騎、義ヲ金鉄ニ打

守リ、籠城シテ居タリケル。

と、例によつて城山城の險阻を構え籠城の兵士の堅固な忠義を記すのみである。それに對し、上巻「嘉吉之亂」(引用3)は、

其後、口々破れて一手に成て、坂本へ落集る諸勢ども申様は、誠に諸口より圍まれ、籠中の鳥、網代の魚の思ひをなす事、無念さよと申ければ、浦上信濃守申けるは、合戦の習ひは勝も負るも常の事なり。……今暫く人馬を休め、一戦して勝利を得べしと、士卒を勇め相待所に、其夜放れ牛十疋計り突合けるを、山名金吾寄たりと取物も取あへず、書写坂本掛東木山城へ引返す。赤松程なる勇將、如斯の敵に恐るゝにあらざれども、是も京都にて諸社諸寺にて赤松父子調伏なる故と其比世上に沙汰しけり。

備前・美作口の合戦利を失ひ、城山の麓に落集る諸勢どもに向つて、教康馬より下り立て、此間面々の忠功神妙なり。是より暇を出す間、各私宅へ帰り給ふべし。我等事、天罰を蒙り自滅する事、覚悟の前なり。父子腹を切ると宣へば、諸勢皆、鎧の袖をそしほりけり。

と、放れ牛の角突きに怯え、坂本から城(木)山城へ逃げ移る奇異めいた話を載せ、それが都における諸寺社の調伏の祈禱の

所為であつたこと、つまり調伏の効験が現れたことは、とりもなおさず作者が赤松を調伏せらるべき反逆者と意識していることを語っている。それはまた、満祐の子息教康にも天罰による自滅の覚悟を語らせていることとも通じてるのである。

山名を始めとする幕府の追討軍の猛攻に、赤松は城山の城で減んで行く。ここでもまた、上巻と中巻とは違いを見せる。

まず中巻「嘉吉年間録」は、

大将満祐曾テ思ヒ定ヌル事ナレバ、イト優然タル粧ニテ、一族幕下ニ打向ヒ、満祐方運命此期ニ究レリ。汝等年来ノ忠節、生ヲ替ルトイヘドモ、豈是ヲ忘却センヤト云テ、腹十文字ニ掻切給ヘバ……

と、例によって満祐が家臣の忠節に感謝しつつ、悠然と死におもむく姿が描かれる。これに対し、上巻「嘉吉之乱」（引用4）は、

性具も思ひ定めたる事なれば、既に腹掻切て伏にけり。其外の兵ども思ひくゝに討死す。嗚呼悲哉、軍起つて久しからず、終に三四日の間に城落にけり。謂はれなき事を思ひ企て、後悔更に其中斐なく、同十日舎弟龍門寺・同伊予守義雅・同播磨守、家々に放火して腹を切る。

満祐個人の死に対する感慨よりも、事件そのものに対する作者

の捉え方が現れている。すなわち、戦闘が始まって僅か数日で落城したのは、この戦いが「謂はれなき事」であつたからと考えているのである。

以上の主だった諸点の比較だけからでも、浄嘉堂文庫本「赤松盛衰記」の上巻と中巻に収められた二つの嘉吉の乱関係記事の性格の違いは明瞭である。上巻「嘉吉之乱」は赤松による將軍殺害事件とそれに続く一連の籠城・追討の合戦は、始めはともかく、結果的には赤松が起こした「反逆事件」であり、神仏にも見離される「謂はれなき事」であつたために「天罰」を蒙つて「自滅」する「運命」のものであつた。一方、中巻「嘉吉年間録」には、赤松一族や幕下・主従の結束や忠節の堅さばかりが強調されていて、反逆者赤松の影はみことなまでに払拭されている。

四

それでは中巻「嘉吉年間録」はどのような性格を持った作品なのであろうか。そこで、今度は中巻「嘉吉年間録」にあつて上巻「嘉吉之乱」に見えない記事に目を通してみよう。前述したとおり、中巻「嘉吉年間録」のほうが叙述が詳細なので、当

然上巻「嘉吉之乱」にない記事は多いのであるが、ここでは中巻「嘉吉年間録」の成立や特徴に関わると思われるものに限って見ていくことにする。

播磨に近付いた幕府の追討軍を、明石人丸塚の合戦で、須磨の塩屋敦盛塚に追い払った満祐の子息教康が、その夜軍評定を開く。席上、浦上伊予守が夜討ちを提案したのを承け、白国土佐守が軍勢を二手に分け、前後挟み撃ちにする案を陳べる記事がある。白国の提言が容れられたものの、結果はそのことあるを予想していた武田信賢や大内持世等の活躍で赤松の敗退に終るのであるが、その戦いで白国は、次のように描かれている。

白国土佐守ハイト無念ノ齒ガミヲ鳴シ、鎧踏バリ声高テ、我ハ是赤松方ニ隠レナキ、神代ヲ去テ十二代景行天皇ノ皇子播磨別ノ命稲背入彦ノ後裔、白国ノ宿禰芸胡多ヨリ二十六世ノ末葉、白国河内守宗康ガ二男土佐守宗定トハ我事ナリ。將軍ノ御味方ニ我ト思ワン武士アラバ、尋常ニ名ノリ合ヒ、勝負アレト呼ハレバ、……当ル敵ヲナギリマ^マ弘ヒ、大内ヲ目ガケテ走セ戦フ。

中巻「嘉吉年間録」の中でも、名乗りを備えた合戦描写はここだけで、このあたりは白国一人の、まさに独壇場である。

次に城山城の陥落の場面、満祐を始め一族の者が次々と自害

する中で、

時ニ上月兵庫介盛貞・白国土佐守宗定・中村丹後守政景、敵ノ血モ刃ニヌラスズテ因果ノ事、未来ノ迷障タリト云ツテ、三人一所ニ太刀ヒツサケ城中ヨリト^ンテ出テ、群ル敵ノ中へ馳セ入り、死モノグルヒニ切テ回レバ、……功ノ武士二十九人切殺シ、今ハ是腹切シト城ノ内へカケテ、既ニ生害ニ及ブ時、白国土佐守一首ノ和歌ヲ詠吟セラル。

かねてかく思ひさだめし事なれば命のほどを何惜らむ
此歌ヲ鎧ノ下袖ヲチギリ、血ヲモツテ書記シ郎等ニ持セ、鞍谷川ノ城ヘヲクリ、三人一所ニ切腹シテ果ラレケル。

と、ここでも最後の戦いを挑んだ三人の中で、一人白国だけが辞世の歌を詠んでいるなど、特別な扱いを受けているといえるだろう。

赤松方の武将では白国が目立っているが、一方の幕府方の武将では大内持世が際立つように書かれている。例えば、その白国自身の言葉の中に「六波羅方ノ惣大将大内修理太夫持世コソ、天下ニ名ヲ得タル達将ナレバ、不意ニ心ヲ附ルノ用心ハヌカルマジ」と出てくるし、また人丸塚の合戦の前に「六波羅ノ惣大将大内修理太夫ハ、敵ヲ謀ルノ名所マ^マニテ、夜討ニ米ラン事兼テノ覚悟ナレバ、態ト本陣ヲ捨置キ、細川勢ニ下知シテ、」

とあるように、大内持世は名將として描かれる。その大内が語る言葉が中巻「嘉吉年間記」に一ヶ所ある。人丸塚で勝利を得て、一休みしている時に、

大内持世申サレケルハ、我管領ノ職ニアレバ止ム事ヲ得ザルノ出陣、殊更伊豆殿（赤松貞村）ニハ同姓ノ事ナレバ、アナガチ本意トモヲボサレマジ。細川殿ニモ累年ノ因ミフカケレバ、討手ヲ望マル、ニテハヨモアルマジ。兎ニ角論言ノ重キトイヒ、忠義ノガルベカラザルノ二ツナレバ、私ノ依怙ニハ替ヘ難シ。是人道ノ常ニシテ、武士タル者ノ道ナレバ、仮令一族同姓タリトモ、矢尻ヲ違エ、キツ先ヲ合セ攻メ戦フ習ニテ、是非ナキ事トラホスラン。……

と、幕府軍に加わった赤松貞村や細川持常に、赤松攻めをその役目柄仕方なく行なっているので、赤松には何の存念もないことを語りかけたものである。ところが「普光院軍記」（姫路・英賀神社蔵）には「大手之軍兵、八月廿一日、依播磨打立而、播磨路工発向ス。先陣ハ細川讃岐守等也」、また「嘉吉記」（群書類従本）も「大手ハ細川讃岐守成之^{ママ}・赤松伊豆守貞村・武田大膳大夫信繁也」などとあつて、大内持世の名は見えない。軍記以外の記録「看聞御記」の六月二十七日条にも「赤松討手細川讃州、山名、赤松伊豆、廷尉等諸大名可発向云々」とあ

り、大内持世は出てこない。それは当然で、將軍義教暗殺の時、細川持之や山名持豊等がいち早く逃げ出したのに、大内持世は刀を抜いて戦い、切り伏せられて、一月余り後の七月二十八日に死んでいるからである。『赤松盛衰記』中巻の「嘉吉年間録」には、実際には死んで存在しない大内持世が赤松攻めに参加していることになっているが、これ以外の嘉吉の乱関係軍記の中では、広峯ツギ田蔵「嘉吉之記」（東大史料編纂所蔵）に、

管領細河右京大夫持之・畠山左衛門督持国・大内介持世以下為相談。義教卿之御子義勝卿守立為主君ト、僅ニ八歳、満祐依為朝敵、不移時日、自京都馳向討手。細河讃岐守持常・赤松伊豆守貞村・大内修理大夫持世・武田大膳大夫信賢・河野・京極、大手之大将。山名右衛門督持豊・同修理大夫教清・同相模守教之、搦手之大将ト聞ユ。

と大内の名が出るぐらいである。以上の二点、白国の活躍とありえない大内の記事が問題といえるだろう。

五

まず、第一点目の、赤松方の武將白国が特別扱いをされている

る理由は、この中巻「嘉吉年間録」が白国氏の子孫の手になる作品だからである。やや長いが、奥書とでもいうべき結びの文を掲げておく。

抑、赤松ノ家系タルヤ、其イニシヘ征西將軍從三位ノ侍從播磨ノ守秀房卿、此国司トナリ、天永二年ノ秋ノ比、赤穂郡赤松ノ庄ニ於テ、始メテ城郭ヲ築キ、白幡ノ城ト名付テ住ミ給ヒシヨリ此方、赤松ヲモツテ氏トシ、一族三十六家ニ分レ、幕下國中ニ散滿シテ、ソノ繁榮限りナク、播磨・摂津・備前・因幡ノ五ヶ国ヲ領シテ、中国ニ其威サカンナリシガ、①武門ノ習ヒ、憤ノ義ヲモツテ時ノ將軍義教卿ヲ殺シ奉リ、義勝將軍ノ討手ヲウケ、嘉吉元年辰ノ九月十日一門幕下残ルモノナク一時ニ敗北シテ生害ニ及ビヌ。

扱寄手ノ面々ハ先ニ記セシ如クナリシガ、②大内・細川ハ曾テ赤松ニ深キ因ミアレバ、討手ニ向ト云ヘドモ、聊カ猶予ニ及ビシ時、山名党ノ人々進ミ出テ、終ニ赤松家ヲ攻メ亡ス。是ニ依テ義勝將軍ノ命トシテ、恩賞ノ為山名右衛門督持豊ニ播磨ノ国ヲ賜リシ也。サレバ天永二年秀房卿、播州入国ノ始メヨリ、嘉吉元年家名断絶ニ至ルマテ三百三十六年ニ及ベリ。

当家白国氏ハ碌クモ景行天皇ノ皇子稲背入彦命ノ後胤タリ

ト云ヘドモ、宝治二年故アツテ赤松ノ一族トナリ、鞍谷ノ城ニ住ス。伯父土佐守宗定ハ軍功ヲ顕ワシ、城山ノ城ニ於テ生害セラレヌ。後覺ノ為ワガ見聞スル処、十ガ一二カクノゴトクナランカ。③時ニ天文四年正月十三日、鞍谷ノ城

主白国土佐守宗安、謹テ是ヲ記ス。

この奥書の傍線を付した③に、この書が天文四年（一五三五）一月、白国宗安の手によって成ったことが記されている。白国宗安は白国宗定の子孫の者であろう。子孫が自家の先祖の活躍を書き残すために軍記を作り出すのは珍しいことではない。嘉吉の乱関係軍記の中で、白国氏が活躍する作品はこの中巻「嘉吉年間録」以外、管見に触れたものはない。

次に大内持世が、既に死んでいるにもかかわらず登場し、かつ重きをなしているのは、②の傍線部に關係がありそうである。明徳の乱・嘉吉の乱を通じて、不倶戴天の敵であった山名氏と違い、「大内・細川ハ曾テ赤松ニ深キ因ミアレバ」と兩者との友好を述べている。確かに明徳の乱では、赤松が大内と一緒に山名と戦っている様子が「明徳記」に記されているし、応永の乱の折は、細川と共同で大内を攻めるさまが「応永記」に載っている。また細川と赤松の因縁はその当時から取り沙汰されており、「建内記」七月十七日条に「今度赤松謀反事、管領就田好

内々得其意歟」との噂があったことを載せているとおりである。さらにその後、赤松は御家再興に細川の力を借りることになるが、一方の大内との「深キ因ミ」がいかなることをさしているのかは、必ずしも判然としない。ただ中巻「嘉吉年間録」と同様、赤松追討の幕府軍に大内の名を載せる広峯ツギ本「嘉吉之記」にも、明徳の乱に触れて、

去明徳二年正月二日、山名奥陸ママ守氏清企謀叛、都乱入之時、赤松綱助義則七百余騎率、神祇官陣取、寄來敵待懸。然所山名方先手小林上野介ト名乗一陣進、味方ニモ大内左京大夫西国勢相隨、神祇官ニテ教剋散々相戦。味方危見ユル所ニ、赤松勢入替椽合攻立々、為一戦、二条大宮辺マテ追出。

と、山名の猛将小林との戦いで、大内と共闘したことを回顧している。中巻「嘉吉年間録」と広峯ツギ本「嘉吉之記」の共通性は、改めて論じなくてはならない問題を含んでいるが、中巻「嘉吉年間録」の成立の裏に、広峯ツギ本「嘉吉之記」のような本があったものかと思われる。

六

上巻「嘉吉之乱」と中巻「嘉吉年間録」とを比較してみると、上巻「嘉吉之乱」は満祐の息彦次郎教康の人丸塚合戦での活躍を詳しく書き、一族の浦上の発言を載せるなど、赤松の内部事情に詳しい者の手に成ったと考えられるが、引用1-4に見たとおり赤松が天下を掌握しようと思つたことを隠さず、謂れなきことを企てて天罰により自滅したとの視点を持つなど、赤松を無批判に同情しているものではない。^{注10}

これに対し中巻「嘉吉年間録」は、上巻「嘉吉之乱」の赤松にとって不都合な記述を全て載せない、きわめて赤松及びその一族・幕下の立場を擁護した党派性の強いものになっている。それは白国宗安の奥書傍線部①に見られるように、將軍義教暗殺を「武門ノ習ヒ、憤ノ義ヲモツテ」の行爲と正当化していく姿勢によるものである。

このように見てくると、やはり上巻「嘉吉之乱」は中巻「嘉吉年間録」より、乱当時の雰囲気をよく伝えているもの、嘉吉の乱を記録する本来の軍記の姿を残したものと考えられるのである。

注1 「看聞御記」永享七年二月八日条。

2 「嘉吉の乱とその関係軍記」(矢代和夫氏執筆)

3 「赤松盛衰記」は矢代和夫氏編「室町時代 赤松軍記資料集 (仮題)」(国書刊行会・刊行予定)に翻刻と解題を所収。なお中巻の解題(松林執筆)に本稿と関連する所がある。

4 和田英道氏「嘉吉物語」の形成」(国文学研究資料館紀要) 第一号 昭和50)

5 矢代和夫氏「赤松嘉吉乱記」補注() (都立大「人文学報」第一四六号 昭56)に詳しい。なお、「赤松嘉吉乱記」などには、願書の全文が載る。

6 高坂好氏「中世播磨と赤松氏」(臨川書店・平3)、同氏「赤松円心・満祐」(吉川弘文館・昭45)には、名を冬氏といい、井原の善福寺にいたので「善福寺殿大御所」と呼ばれたとある。

7 今谷明氏「土民噺々 一四四一年の社会史」(新人物往来社・昭63)

8 「建内記」嘉吉元年七月二十八日条に「大内某^{多々良持世}今日逝去、多年在国之処依召上洛、於赤松許被紙、終以墜命、可悲々々」とある。

9 物語系の「嘉吉物語」は、大内ではなく、「一色左京大夫殿」となっている。

10 上巻「嘉吉之乱」と同じ系統に属する「普光院軍記」・実祐本「赤松記」等の「赤松嘉吉乱記」系諸本との比較分析が必要であるが、後日を期したい。

本稿を成すにあたり、元東京都立大学教授矢代和夫先生から資料提供の便宜を賜った。記して深謝する次第である。